

High Performance Sport Newsletter

Vol.30

2018

ハイパフォーマンス スポーツカンファレンス 2017

平昌オリンピック・パラリンピックへの取り組み

ドーピング通報窓口の設置

ジャパン・ライジング・スター・プロジェクト始動

ハイパフォーマンス スポーツ・カンファレンス 2017

～「世界で勝つ」を集める!～ 11月21日-22日 ハイパフォーマンスセンター(HPC)



日本スポーツ振興センター(JSC)は、これまでJISSスポーツ科学会議やその他ハイパフォーマンスセンター(HPC)で実施していた会議を統合し、「ハイパフォーマンススポーツ・カンファレンス2017」を初開催しました。国内外から約400名が来場しました。期間中は「世界で勝つ」を集める!」をテーマにさまざまなセミナーや企画を行いました。

プログラム

(敬称略)

Day1	
キーンノートスピーチ	鈴木大地 (スポーツ庁長官) ロジャー・ジャクソン (JSCハイパフォーマンスセンターアドバイザー)
講義1	「ニュージーランド式メダル獲得のための医学支援-研究」 ポール・ラウソン (オークランド工科大学)
講義2	「ハイパフォーマンスセンターの医学機能の活用法とは」 石毛勇介 (JSC)
ワークショップ	「ハイパフォーマンスセンターの未来について語ろう」 JSC
セミナー	
「日本のハイパフォーマンスセンターについて知ろう」	JSC
Day2	
ウォーミングアップ	「勝つためのチームビルディング」 立谷寿久、福井邦宗、山田裕生 (JSC)
セミナー1	「タレント発掘・育成の成功要因とは」 エリッサ・モーレイ (JSCスポーツ開発部アドバイザー)
セミナー2	「科学的サポートが効果を発揮するために何が必要か?」 窪康之、松林武生、古屋あゆみ、中村大輔 (JSC)
セミナー3	「オリンピックへの道筋」 小笹知美 (公益財団法人日本ラグビーフットボール協会)、 山下修平 (JSC)
セミナー4	「見て知って、食べて分かる!栄養サポート」 伊藤心 (自衛隊体育学校)、西岡良仁 (ミキハウス)、 河森直己、浜浦幸広 (株末来教育総合研究所)
セミナー5	「メディカルチェックで何をみるか?」 座長:奥脇 透 (JSC) パネリスト:中嶋耕平、土肥美智子 (JSC)、真鍋知宏 (慶應義塾大学)、三富陽輔 (JSC)
セミナー6	「パラリンピックへの道筋」 一ノ瀬メイ (近畿大学)、河合純一 (JSC)
パネルディスカッション	「アスリートにとってのハイパフォーマンスセンターとは」

鈴木長官によるキーンノートスピーチ

初日のキーンノートスピーチでは、スポーツ庁の鈴木大地長官、HPCのアドバイザーであるロジャー・ジャクソン博士 (Roger Jackson)、元カナダオリンピック委員会会長、Own the Podium 創始者が登壇しそれぞれの視点でハイパフォーマンススポーツの在り方について講演しました。



Day1のキーンノートスピーチ: 鈴木大地スポーツ庁長官

メダル獲得競技の数を増やそう

鈴木長官は今後のハイパフォーマンススポーツの在り方について論じました。リオ2016大会での日本のメダル獲得状況について、オリンピックは史上最多の41個(うち金メダルは12個)を獲得したものの、東京1964大会では16個の金メダルを獲得し、当時の種目数に対し9.8%の獲得率をリオ大会の311種目に当てはめると「31個以上の金メダルを取らなければならなかったことになる」と指摘しました。

リオ2016とロンドン2012を比べると日本の金メダルは7から12に、合計では38から41に増加したもののメダル獲得合計は減少した。このほか、陸上競技実戦場ではブース展示としてHPC外部の企業や団体との連携等で開発した技術や製品や女性アスリートへの支援を紹介するブース展示を行いました。

タレント発掘・育成の成功要因とは

2日目のセミナーでは、JSCスポーツ開発部アドバイザーのエリッサ・モーレイ氏がタレント発掘育成の先進国の成功要因について講演しました。モーレイ氏は競技未経験者から金メダリストを輩出したオーストラリアのカヌー・カヤックにおけるFTEM (フアンダーション、タレント、エリート、マスタート)の枠組みによるタレント発掘プロジェクトを紹介しました。

また、タレント発掘および育成プロジェクトを成功させる秘訣として、包括的なプログラムとしてプログラミングし目標設定を明確化する、選考基準に達していないにもかかわらず多く選ぶこと、コーチの存在はもちろん、競技を楽しめる環境の提供、競

リオ2016大会 国別金メダル獲得競技(オリンピック)

競技数	国名	金メダル獲得競技
14 (18)	イギリス	自転車、ボート、陸上競技、水泳、体操、セーリング、馬術、カヌー、テニス、ホッケー、ボクシング、トライアスロン、ゴルフ、テコンドー
12 (20)	アメリカ	水泳、陸上競技、ボクシング、体操、バスケ、バレーボール、レスリング、自転車、柔道、射撃、トライアスロン、テニス、ボート
9 (19)	ドイツ	カヌー、射撃、陸上競技、ボート、馬術、バレーボール、体操、自転車、サッカー
9 (17)	中国	水泳、ウエイトリフティング、卓球、陸上競技、バドミントン、テコンドー、自転車、射撃、バレーボール
9 (15)	ロシア	レスリング、フェンシング、体操、水泳、柔道、テニス、ボクシング、近代五種、ハンドボール
7 (15)	フランス	ボクシング、馬術、柔道、カヌー、ボート、フェンシング、セーリング
6 (11)	オーストラリア	水泳、ボート、セーリング、射撃、近代五種、ラグビー
5 (10)	日本	レスリング、柔道、水泳、体操、バドミントン
5 (9)	韓国	アーチェリー、テコンドー、フェンシング、射撃、ゴルフ
5 (9)	イタリア	射撃、水泳、柔道、自転車、フェンシング
3 (4)	ハンガリー	水泳、カヌー、フェンシング

競技数のカッコ内は全てのメダル獲得競技数

競技力強化のための今後の支援方針(鈴木プラン)のポイント

(オリ・パラ一体、夏季・冬季競技共通)

1. 中長期の強化戦略プランの実効性を支援するシステムの確立	
中央競技団体(NF)	ハイパフォーマンスセンター(HPC)
◆強化戦略プランの策定・実践・更新 ・2大会先のオリンピック・パラリンピックにおける成果を見通した中長期の強化戦略プランの策定・実践・更新 ・シニアとジュニア(次世代)のトップアスリートの強化等を4年単位で総合的・計画的に推進 ◆強化戦略プランに基づく育成・強化活動 シニア・ジュニア(次世代)の一貫指導体制 発掘育成 指導者・スタッフの育成 トレーニングの強化 スポーツ医・科学サポート 情報戦略、スポーツ・インテグリティ、アンチ・ドーピング 広報戦略など	◆協働コンサルテーション等の実施 ・JSCに設置されたハイパフォーマンスセンターにJPC・JPC等を含めた「協働チーム」を設置 ・協働チームはNFの強化戦略プラン(4年、8年単位)におけるPDCAサイクルの各段階で多面的にコンサルテーション・モニタリングを実施 ◆NF評価への活用 ・協働チームが得た知見は、スポーツ庁等によるターゲットスポーツの指定や各種事業の資金配分に関するNF評価に活用 ・評価にあたっては過去の大会成績を加味しつつ、強化戦略プランの達成度を重視 ・NFの「現在」や4年先、8年先の「将来」を見通した取り組みを積極評価

2. HPCの機能強化	3. アスリート発掘への支援強化	4. 女性トップアスリートへの支援強化	5. ハイパフォーマンス統括人材育成への支援強化
スポーツ・インテリジェンスセンター(仮称)の設置 スポーツ技術・開発センター(仮称)の設置 アスリート・データセンター(仮称)の設置 ナショナルトレーニングセンター(NTC)の拡充整備	日本体育協会(JASA)の参画(種目適性型・種目最適型を担当、「TIDシンボジウム(仮称)」の全国開催) 中体連、高体連、高野連、障がい者スポーツ協会、医療機関等との連携	女性アスリートに特化した支援(高水準の競技大会のモデルプログラム実施、女性アスリート出身のエリートコーチ育成) 女性特有の課題対応への支援(い・科学サポートの充実、巡回サポートの実施)	ワールドクラスコーチ育成への支援 ハイパフォーマンスディレクター育成への支援(必要な資質能力等の分析、IF等におけるOJTを含むモデルプログラムの作成・運用)



「2020年は一つのゴールではあるが、それ以後もわれわれの強化は続いていく。少子化の中にあっても効率的な強化システムを考え抜く必要がある。」

そのための対応の一つとして、現在のトップチームの強化策を講じるのと並行して、4年後、8年後を見据えた計画を練らなければならぬ。今のトップの強化とタレント発掘をどう両立させるのが大切だ。

加えてHPCの機能、さらに、女性アスリート、ハイパフォーマンス統括人材の育成についても支援を強化していく必要がある」と説いています。

技術団体や関係機関との連携、取り組みの広報の重要性などを説きました。

セミナー3、6 オリンピック／パラリンピックの スウエイ

また、現役アスリートによるセミナーでは「オリンピックの道筋」「パラリンピックの道筋」と題して、小笹知美(公益財団法人日本ラグビーフットボール協会、一ノ瀬メイ(近畿大学／パラ水泳・競泳個人メドレー)の2選手が自身のこれまでの道筋についてご紹介を頂きました。

このうち、リオ大会パラ水泳個人メドレーのフ瀬選手は、パラリンピック出場を志したきっかけとして、地元障害者スポーツセンターにプールがあったこと、幼少期にアテネ大会に出場した山田拓朗選手のレースを見たことなどを挙げました。フ瀬選手は水泳以外にもバレーやタップダンス、陸上競技などの経験もあり、さまざまな運動経験が競技に役立っていることを紹介しました。

一方、順調に国際大会で実績を残した高校1年の時、ロンドン大会の出場を逃したことに触れ「自分では頑張っているつもり

国競技力強化支援について
鈴木長官は第2期スポーツ基本計画において東京オリンピック・パラリンピックで過去最高の金メダル数を獲得する等優秀な成績を収められるよう国が支援することを盛り込んでいること、また、その実現に向けてHPCの有する機能等の充実を図ることなどに触れ「大規模な国際競技大会が相次ぎ、国民のスポーツに対する関心が高まっているこの機会を活かして、積極的に改革を進めていけるように取り組んでいきたい」と強調しました。

「JISSの機能をフル体験してみよう」
JISSの館内機能を知ってもらう体験ツアーを実施しました。バランスの取れた献立の提供など食事の面からハイパフォーマンスをサポートするレストラン「アールキューブ(R)」をはじめ、低地で高地トレーニングの効果が得られる低酸素トレーニング室、さらに空気を抵抗を体感する風洞実験棟や温度・湿度・気圧を変えて厳しい気象条件を人為的に作り出す環境制御実験室、そし

「オリンピックへの道筋」
小笹知美(公益財団法人日本ラグビーフットボール協会)、山下修平(JSC)

1日目に行われたワークショップ「ハイパフォーマンスセンターの未来について語ろう」で出されたさまざまな意見を受けて、パネリストがHPCをより快適に有効に活用するためのアイデアを出し合いました。

登壇したパネリストは以下の4選手で、いずれもHPCを利用して東京2020大会を目指し強化に励んでいるアスリートです。

鈴木徹(SMBC日興証券株)／パラ陸上競技走り高跳び等、一ノ瀬メイ(近畿大学)／パラ水泳・競泳個人メドレー、上田ゆい(JOCエリートアカデミー)／ライフル射撃



パネルディスカッション登壇者 (右から鈴木選手、一ノ瀬選手、上田選手、三宅選手)



Day2のJISS体験ツアー

生)、三宅諒(フェンシングステージ) 敬称略
施設の使用頻度は競技や選手によってまちまちですが、さまざまな競技のアスリートが知り合う機会でもあるため、互いのトレーニング方法や用器具、器具などの情報を交換し合うコミュニケーションの場として、カフェや調理設備等があると良いのでは、といった意見や、それらの設備を活用するための個々のコミュニケーション能力も求められていることなど活発な意見が出されました。

ハイパフォーマンス戦略部長に聞く HPCの存在意義を示したカンファレンス 競技力向上から国民の健康にも寄与

久木留 毅 (ハイパフォーマンス戦略部長)

国内外のネットワーク拠点になるべきHPC
2日間にわたり開催された「ハイパフォーマンススポーツカンファレンス2017」は、JISSとNTCがHPCの実情を国内外に広く発信するための「ショーケースの役割を果たした」と、久木留毅ハイパフォーマンス戦略部長が2日間を振り返りました。

やNTCを活用している選手やコーチ、日本の各地域医科学センターの関係者、韓などアジアの医科学関係者も含まれます。HPCはこうした国内外の人々を結びつけるネットワーク拠点になるべき存在。単にアスリートの強化のみにとどまっているわけではない。そこを知らせてもらえたいことは大きな意味があります」

約2年が過ぎた。NTCはオリパラ2体の練習施設として2019年6月の完成に向けて拡充整備を進めています。NTCとJISSが両輪となり初開催したハイパフォーマンスカンファレンスを終え、久木留毅部長は「HPCは①ハード面、②ソフト面、③ヒューマン面の三つで着実な前進を見せています」と手応えをつかんでいます。

「ハード面では目下、オリパラ2体のNTC拡充工事が進んでいて、車いす移動などバラス選手の動線にも配慮した施設が完成します。一方、国の支援を受けて構築しているデータベースも、2018年にはオリパラの選手を二元管理できる体制が整います。合宿時の食事分析、五輪選手のトレーニング方法をバラス選手に転用するなど、データの有効活用がより活発化するでしょう。」

「ソフト面では、競技団体への情報提供がより強化されます。選手村の各国の動き、リアルタイムの各国の動き、マテリアル開発の実情など細かい情報がより優位に載せる環境に近づくと考えます。」

味の素ナショナルトレーニングセンター (NTC)と国立スポーツ科学センター

「ハード面では目下、オリパラ2体のNTC拡充工事が進んでいて、車いす移動などバラス選手の動線にも配慮した施設が完成します。一方、国の支援を受けて構築しているデータベースも、2018年にはオリパラの選手を二元管理できる体制が整います。合宿時の食事分析、五輪選手のトレーニング方法をバラス選手に転用するなど、データの有効活用がより活発化するでしょう。」

東京2020大会は2年後に迫る中、競技力強化の取り組みは大会閉幕後も続く。夏のオリパラ開催都市は24年がパリ、28年はロスに決定し、冬季も22年の北京が決まっています。19年には26・30年の冬季開催地が決まる見通しで、いずれかに札幌が決まる可能性があります。このような中、持続可能な競技力強化の体制づくりにはHPCだけでなく、地域のスポーツ医科学センター、海外の研究機関との連携の強化が急務です。同時に、HPCのドアを開き、蓄積された高度な知見を国民に広く知らせる機会がこのカンファレンスだったのです。

「F1の世界ではマシン開発により向上した技術がやがて市販の量産車に採り入れられることがあります。HPCも同様に、



久木留 毅 (くきどめ たけし)
日本スポーツ振興センター ハイパフォーマンスセンター ハイパフォーマンス戦略部長、国立スポーツ科学センター副センター長。専修大学 教授。スポーツ医学博士。英国ラフバラ大学客員研究員。日本レスリング協会 特定理事、元ナショナルチームコーチ、テクニカルディレクター等を経て、2015年10月より文部科学省および経済産業省のクロスアポイント制度にて日本スポーツ振興センターに在籍出向中。

「F1の世界ではマシン開発により向上した技術がやがて市販の量産車に採り入れられることがあります。HPCも同様に、

「F1の世界ではマシン開発により向上した技術がやがて市販の量産車に採り入れられることがあります。HPCも同様に、

「F1の世界ではマシン開発により向上した技術がやがて市販の量産車に採り入れられることがあります。HPCも同様に、

ドーピング通報窓口を通じたドーピングの防止活動の推進

ドーピング通報窓口 「あなたが守る-STOP DOPING-」



五十嵐 健 (いがらし けん)
警視庁を2017年3月で定年退職。最終勤務先は上野警察署組織犯罪対策課長(警視)。2017年4月からドーピング調査長として日本スポーツ振興センターに勤務。

クリーンでフェアなスポーツを実現するため、 ドーピングの防止について伝えたい

五十嵐 健 (スポーツインテグリティユニット アンチドーピンググループドーピング調査長)

はじめに

検査をすり抜ける巧妙なドーピング行為の広がりやロシアにおける組織ぐるみのドーピング隠ぺい工作。また、過去のオリンピック競技大会で採取された検体の再分析によるアンチドーピング規則違反の発覚などがニュース等で伝えられています。

アンチドーピング活動の先進国といわれる英国やオーストラリア等のアンチドーピング機関では、巧妙化・組織化するドーピング行為への対策の一として、情報(インテリジェンス)を用いたドーピング調査を行っている。その効果的な実施を図るため、警察経験者を配置し、犯罪・薬物捜査に係る知見や経験を活用しています。そのような先進事

例を参考に、JSCでも同様の体制強化を検討していたところ、私は、平成29年4月に、警視庁警察官を定年退職後、スポーツインテグリティユニットアンチドーピンググループにドーピング調査長として着任しました。

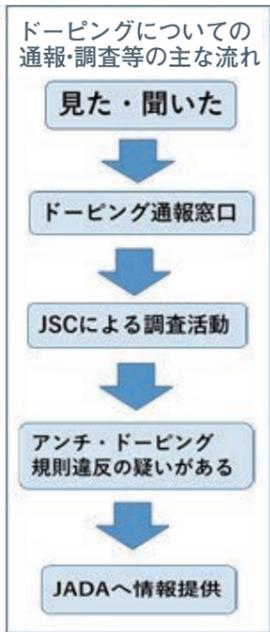
「ドーピング通報窓口」の設置

JSCは、平成29年5月に、「ドーピング通報窓口」あなたが守るSTOP DOPING」を設置しました。その主な目的は、ドーピング検査だけでは捕捉できないアンチドーピング規則違反を特定するための情報を得ることです。世界アンチドーピング規程第2条及び日本アンチドーピング規程第2条で規定されているアンチドーピング規則

違反の10個の種類のうち、ドーピング検査により発見できる違反は、主として「競技者の検体に禁止物質又はその代謝物、若しくはマーカーが存在すること」(2・1項)が挙げられますが、「禁止物質又は禁止方法を保有すること」(2・6項)等をはじめとしたその他のアンチドーピング規則違反を発見し、特定するためには、ドーピング検査では得られない情報(インテリジェンス)を集めることが重要です。

現在では、ドーピング通報窓口の運用に加え、関係機関が主催するアンチドーピング関連の会議や研修会に参加して情報(インテリジェンス)を活用したドーピング調査について理解を深めることや競技団体の関係者と会話をしながら情報収集に努めています。

スポーツ基本計画(平成29年3月スポーツ庁発表)では、アンチドーピングに関する関係機関間の情報共有体制の構築が重要施策として掲げられており、JADAとの連携強化はもとより、その他の



- 次のメッセージを表現しました。
- 通報 = 情報提供
 - 手を離さない = 見捨てない、助ける
 - あなたが守る = 競技者、サポートスタッフ、関係者等の助けが必要
 - STOP DOPING = ドーピング行為の抑止

ドーピング通報窓口サイトURL <http://report-doping.jpnsport.go.jp/>